

初期農耕開拓活動の諸形態

酒 井 龍 一

はじめに

本稿は、西日本の代表的な弥生集落遺跡から出土した石器組成を観察した、先の「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」(『文化財学報 第四集』 奈良大学文化財学科 一九八六年)と題する作業の続編をなす。

第一章 問題の所在

―各地で一様の生業活動がされたわけではない

近年の考古学的成果は、北部九州に始まる弥生文化は急激な速度で普及し、東北でも早くも弥生前期に稲作水田農耕が開始された可能性を示唆している(斎野一九八八等)。そして今や弥生集落の生業活動は、北部九州や近畿や伊勢湾沿岸だけでなく、東北地域であっ

ても実り豊かな水田稲作風景としてイメージされようとしている。だが実際には、弥生文化の及ぶ各地での生業活動は多様であったし、初期農耕定着過程における開拓活動も一様にされたわけではない。また、その時代的变化も地域で様々であった。

さて、弥生文化を特徴づける石器に、いわゆる稲の穂摘み用の石包丁(石毛一九六八他)と樹木伐採・加工用の磨製石斧類(佐原一九七七・一九八二他)がある。日本中のいづこの弥生遺跡を発掘しても、一般的にはこれら石器類は出土する。だがその数や組成率は地域により大きく異なる(酒井一九八六)。同じような弥生集落を同じ面積で発掘しても、石包丁が何百・何千点も出土し石斧類と比べてその数が圧倒的主体となる場合や、逆に何百点もの蛤刃石斧が出土し石包丁はわずか十数点しか出土しない場合もあり、ついでには前に提示したとおりである。別に関東においては小規模発掘では石包丁や石斧類がほとんど出土しないかもしくは数個〜十数個程度であることが一般的で、弥生集落としてやや特異な様相をもつ地域も

ある。このように多様な考古学的現象が確認できる限り、各地の生業活動に基本的な多様性を相定しても問題はなからう。

この点に注目した先の観察では、石包丁と石斧類の組成に関する限り、西日本各地で固有の組成率をもち、かつ地方毎に基本的異なる現象を認めた。地方毎で石器組成が異なる事実は、同じ弥生文化の下でも、地方毎に生業活動の比重のかけ方がかなり違っていたことを示す重要な現象と評価できる。また石器組成の時代的推移にも地方的個性があり、やはり生業活動の変化のあり方に多様性が想定される。こうした考古学的現象の合理的な理解には、まだ未解決の石製品以外の鉄・貝・木製穂摘み具や鉄製斧類の実態、石鎌や刃器類のような石包丁と別器種・同機能の問題（金関・佐原一九八五等）、あるいは弥生人の石器廃棄パターン等、諸問題の検討が不可欠となる。

筆者は、これら未解決の問題を将来に残しながらも、集落遺跡から出土する石器類の数量と組成率に注目し、弥生人達の生業活動の実態にアプローチすべく作業を進めている。そして先稿では、西日本各地二三か所の代表的な集落遺跡から出土した石器類（石包丁・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧）をとりあげ、畿内・瀬戸内海北岸・北部九州・伊勢湾沿岸の組成・数量モデルを構成し、弥生人の生業行動パターンを地域的・時代的特性として提示した。本稿では、そのうち特に各地・各時代の「組成モデル」を解説し補

強しながら、初期農耕定着過程における開拓活動の地域的特質を把握する。

第二章 各地の組成基本モデルの追認

―穂摘み活動主体型・伐採活動主体型

今一度、西日本各地における弥生時代全体の石器組成基本モデルを提示する。拠点集落遺跡から出土する石器類（石包丁と石斧類）は、北部九州・畿内・伊勢湾沿岸の三地域では基本的に異なる（第1図）。

北部九州型

- 一、石包丁が四割、石斧類が六割前後で、石斧類が多い。
- 二、石斧類の中では蛤刃が過半数を占め、残りを柱状と扁平の片刃類で分ける。
- 三、石包丁と蛤刃石斧は同数程度である。

畿内型

- 一、石包丁が八割、石斧類が二割前後で、石包丁が圧倒的に多い。
- 二、石斧類では蛤刃が半数強を占め、残りを柱状と扁平の片刃類で分ける。
- 三、石包丁に対する蛤刃石斧は、一割六分前後である。

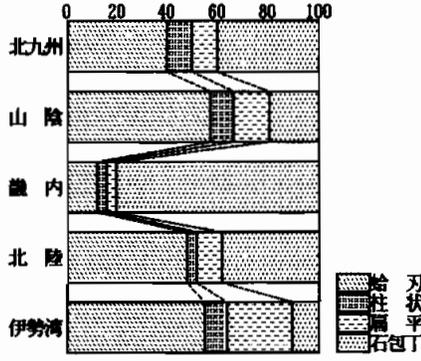
伊勢湾型

一、石包丁が一割、石斧類が九割前後で、石斧類が大多数である。

二、石斧類の中では、太形蛤刃が過半数を占め、残りを柱状と扁平で分ける。

三、片刃石斧類の中では扁平が柱状の三倍程度と、扁平がかなり多い。

四、石包丁に対する蛤刃石斧は四〜八倍程度と、蛤刃石斧が圧倒的に多い。



第1図 西日本における石器組成基本モデル

石包丁を稲の穂摘み、太形蛤刃石斧を樹木の伐採、柱状と扁平片刃石斧を木材の加工活動用の道具と仮定した場合、弥生人の生業活動の地方的特質を強調し表現すると、北部九州地域は穂摘み・伐採両活動型、畿内地域は穂摘み活動主体型、そして伊勢湾沿岸地域は伐採活動主体型となる。

前回とりあげなかった日本海沿岸は、後述のように蛤刃石斧を圧倒的主体とする伐採活動主体型、瀬戸内海沿岸は石包丁を圧倒的に

主体とする伐採活動主体型を示す。北部九州では時代的な変化が大きく、前半期すなわち縄文晩期〜弥生前期は典型的な伐採活動主体型、後半期すなわち中期以降は穂摘み活動主体型となる。

日本海沿岸の様相 — 伐採活動主体型

前回に紹介しなかった日本海沿岸部の様相を、先ず次の五遺跡で把握する。結果として、すべて蛤刃石斧が石包丁の出土数を上回る伐採活動主体型を示す(第二図上半)。

島根県西川津遺跡 松江平野の拠点集落である。石包丁約八点(五・一%)・蛤刃石斧一〇八点(六九・二%)・柱状片刃石斧一八点(一一・五%)・扁平片刃石斧二点(一四・一%)の約一五六点が出土した。石包丁に対する蛤刃石斧は十三・五倍程度で、蛤刃石斧が極端に多い。

島根県目久美遺跡 米子平野の拠点集落である。石包丁九点(二五・七%)・蛤刃石斧一九点(五四・三%)・柱状片刃石斧二点(五・七%)・扁平片刃石斧五点(一四・三%)の計三五点が出土した。石包丁に対する蛤刃石斧は二・一倍である。蛤刃石斧が多いが、西川津程でもない。

京都府途中ヶ丘遺跡 丹後半島の拠点集落である。石包丁四点(一三・八%)・蛤刃石斧一六点(五五・二%)・柱状片刃石斧三点(一〇・三%)・扁平片刃石斧六点(二〇・七%)の計二九点が出

土した。石包丁の四倍の蛤刃石斧が出土し、蛤刃石斧が多い。

福井県吉河遺跡 若狭湾沿岸の拠点集落である。石包丁七五五

点(三九・五%)・蛤刃石斧八九点(四六・八%)・柱状片刃石斧一〇

点(五・三%)・扁平片刃石斧一六点(八・四%)の計一九〇点が

出土した。石包丁の一・二倍の蛤刃石斧が出土がある。

石川県吉崎次場遺跡 能登半島の拠点集落である。石包丁三三

点(三四・七%)・蛤刃石斧四九点(五一・六%)・柱状片刃石斧一

点(一・一%)・扁平片刃石斧一二点(一二・六%)の計九五点の

出土がある。柱状片刃が少ないことを除き、吉河遺跡の組成とほぼ

共通する。

このように各遺跡で個性的な組成を示すが、全体としてのような
様相をもつ。

一、石斧類が石包丁の一・二〜十倍以上で出土し、石斧類が主
体をしめる。

二、石斧類の中では太形蛤刃が過半数を占め、残りを柱状と扁
平の片刃類で分ける。

三、片刃石斧類では扁平が多い(西川津を除く)。

四、蛤刃石斧が石包丁より多い。

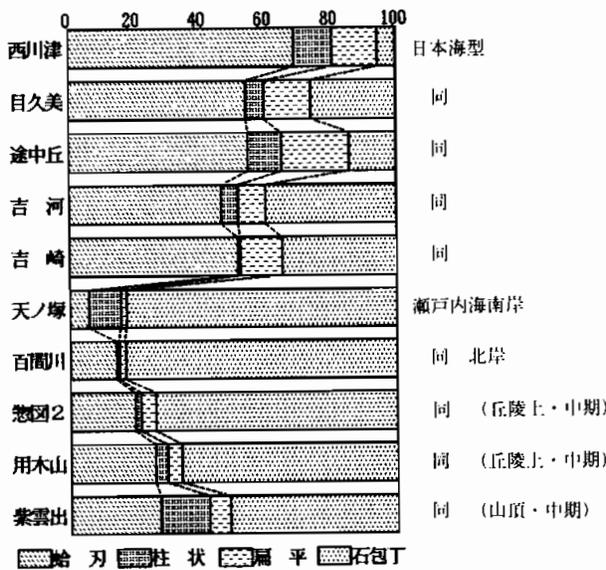
五、北陸の方が山陰よりも石包丁が多い傾向にある。

六、石包丁主体の畿内型や北部九州後半型とは基本的に異なり、

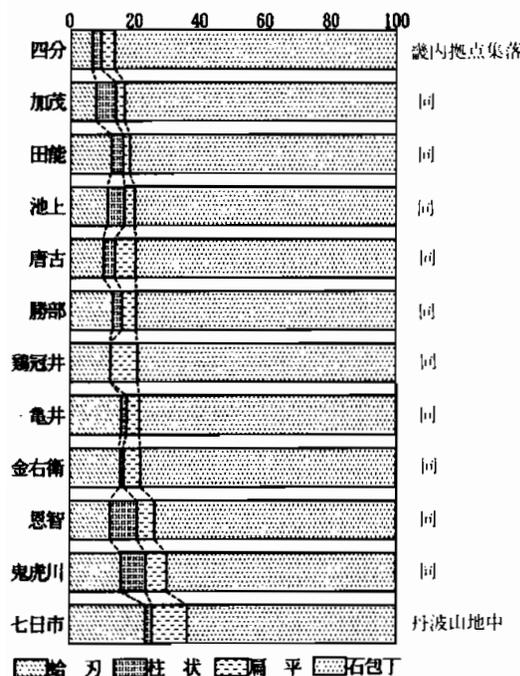
蛤刃石斧主体の北部九州前半型や伊勢型に近い。

山陰型・北陸型の設定 — 北陸のほうが山陰より石包丁が多い

現時点ではこの地域の良好な石器資料は多くはない。これら五遺
跡を少しミクロに観察すると、注意されるのは山陰では蛤刃石斧が
多数にもかかわらず、石包丁の出土は少ない傾向である。例えば西
川津では未成品を含む蛤刃石斧が一〇八点に対し、石包丁はわずか
八点程度にすぎない。これ程に極端でないがこの傾向は他遺跡でも
みられ、山陰の特性だろう。それに対し、北陸の吉河や吉崎次場で



第2図 日本・瀬戸内海沿岸の
石器組成



第3図 畿内における石器組成

はこれ迄にかなり石包丁が出土し、山陰とは若干の様相の違いがある。同じ日本海側沿岸でも、石包丁が少ない「山陰型」と、石包丁が多い「北陸型」に区別される可能性がある(第2図)。

畿内型の追認 — みんなが同じ石器組成

前回では、畿内中央部に所在する約五〇〜六〇か所程度の拠点集落のうち、池上・唐古・鬼虎川・恩智・田能・勝部・瓜生堂・栄の池の八遺跡で、石包丁を圧倒的に主体とする畿内型組成を確認した。今回は、更に金右衛門垣内・鶏冠井・四分・加茂も畿内型であるこ

とを確認し追加する(第3図)。旧国名で見ると、大和・和泉・河内・山城・摂津で共通する可能性がより高くなった。

畿内型の北限 — 丹波の山奥も穂摘み活動主体型

石包丁主体の畿内型組成は、西は瀬戸内海北岸の広島付近に迄及ぶ。東は、三重県が蛤刃石斧主体の伊勢湾型となることから、その範囲は大和盆地を大きく越えることはない。北側はどうか。畿内北辺たる能勢盆地の拠点集落・大阪府大里では石包丁七点・蛤刃石斧二点扁平片刃石斧一点が出土し、資料数は不十分だが畿内型の一端を示唆する。更に北の丹波山地中央の拠点集落・兵庫県七日市(第三図)では、兵庫県教育委員会藤田淳氏の御教示によると、石包丁一八七点・蛤刃石斧六九点・柱状片刃六六・扁平片刃三二点の計二九四点が出土した。蛤刃石斧がやや多いこと等、環境に対応した若干の特徴をみせるが、基本的には石包丁が主体をなす畿内型組成と理解できる。更に北側、若狭湾沿岸の拠点集落・途中ヶ丘では、明らかに蛤刃石斧が主体となる日本海型となる(第2図)。こうした状況から、畿内型の北端は丹波山地中の七日市付近に求められる。

北部九州型の追認

— 佐賀平野も福岡平野と同じ穂摘み伐採両活動型

北部九州型組成の事例を追加する。前回では福岡県板付遺跡を代表させたが、佐賀平野の拠点集落・みやこ遺跡を掲げる。石包丁四〇

点(三六・七%)・蛤刃石斧三八点(四四・三%)・柱状片刃石斧一三点(七・八%)・扁平片刃石斧一八點(四・七%)の計一〇九点が出土した。福岡県板付と比較すると片刃類がかなり多いが、石包丁と蛤刃石斧とが同数程度で出土し、基本的には北部九州型とみて良いだろう。

瀬戸内海沿岸の様相 — 南岸も北岸も穂摘み活動主体型で共通

前回では岡山県百間川・広島県大宮・山口県綾羅木郷台地を代表させ、瀬戸内海北岸部の様相を概観した。その結果、本州西端部の山口県を除き、石包丁を圧倒的に主体とする石器組成がみられ、それはおおむね畿内型と共通することがわかった。今回は香川県矢ノ塚遺跡の石器資料から、瀬戸内海南岸の様相を把握する。讃岐の拠点集落である練兵場遺跡の矢ノ塚からは、打製石包丁が百数十点に對し、蛤刃石斧一〇点・柱状片刃石斧一六點・扁平片刃石斧三点が出土し、その組成率は対岸の百間川とおおむね共通することがわかった(第2図)。現時点では一遺跡だけだが、瀬戸内海両岸の拠点集落は、山口県を除き、共通すると理解しておこう。

丘陵上の様相

— 丘陵は平地の基本的組成と共通するが、斧類が多い
集落の立地によって石器組成がどうなるかを、瀬戸内海沿岸の中期後半でかつ丘陵上という時代的・立地的限定をした資料を提示し、

平野上に継続して立地する拠点集落の組成と比較する(第2図)。

岡山・用木山遺跡 丘陵上に立地する集落遺跡である。中期後半の石器類として、石包丁一八一点(六五・六%)・蛤刃石斧七二点(二六・一%)・柱状片刃石斧二一点(四・〇%)・扁平片刃石斧二点(四・三%)の計二七六点がある。石包丁に対する蛤刃石斧は三九・八%となる。

岡山・惣図遺跡第2地点 惣図は先の用木山遺跡に隣接する丘陵上の集落遺跡で、中期後半の石器類として、石包丁八二点(七三・九%)・蛤刃石斧二二点(一九・八%)・柱状片刃石斧二点(一・八%)・扁平片刃石斧五點(三・五%)の計一一二点がある。石包丁に対する蛤刃石斧は二六・八%となる。

隣在するこれら二集落の組成率に大差はないので、平均して次のように把握する。

一、石包丁は六割八分、石斧類が三割二分程度で、石包丁が多い。

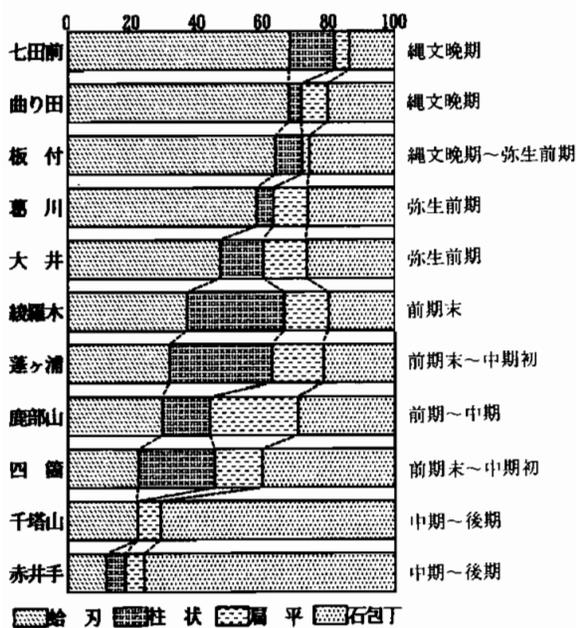
二、蛤刃石斧が全体の二割四分程度、石包丁に対して三割六分程度、石斧類では蛤刃が圧倒的に主体をなす。

三、これを瀬戸内海北岸・後半・丘陵型と理解する。

四、平地の拠点集落と比較し、蛤刃石斧が多いのが特徴である。

五、全体として組成率が近いのは畿内前半型である。

香川・紫雲出山遺跡 更に高所に立地する瀬戸内海南岸の中期



第4図 北部九州における縄文晩期～弥生後期の石器組成

後半の山頂上の高地性集落・紫雲出をあげる。中期後半の石器類として既に、石包丁二四点(五一・一%)・蛤刃石斧一三点(二七・七%)・柱状片刃石斧七点(一四・九%)・扁平片刃石斧三点(六・四%)の計四七点が出土し、石包丁に対する蛤刃石斧は五四・二%である。用木山や惣図という丘陵上の集落と比べて更に石包丁が少なく、また蛤刃石斧が更に多い傾向にある。こうした諸遺跡を考えあわせると、丘陵上や山頂の集落は平地の拠点集落と比べて、蛤刃石斧の割合が多い傾向が示唆される。

第三章

初期農耕定着過程における開拓の諸形態

― 伐採活動主体か、はたまた穂摘み活動主体か

北部九州の様相 ― はじめに多数の蛤刃石斧ありき

近年の調査では、最古の水稻農耕活動にかかる一連の痕跡が、佐賀県菜畑(中島一九八二)・福岡県曲り田(橋口一九八四)・同板付遺跡(後藤他一九七六)等で発掘され、従来からの認識どおり、北部九州でわが国における初期農耕活動が開始された可能性が更に高くなった。それらは、いわゆる突帯文土器や板付一式土器を伴い、従来の時代名称による限り、縄文晩期から弥生前期にかけてその開始と定着過程がある。この他にも福岡県有田七田前(松村他一九八三)や十朗川(吉岡他一九八二)のように、その可能性が考慮される遺跡は北部九州に数多い。ここで、農耕開拓が開始された直後の縄文晩期～弥生前期における石器類(石包丁と石斧類)の組成に注目する。縄文晩期の七田前・曲り田、晩期～弥生前期の板付、弥生前期の葛川・大井三倉の福岡県下五遺跡である(第4図)。

一、いずれも蛤刃石斧の割合が極めて高く、全体の過半数を越える(七〇～五〇%)。

二、石包丁は一〇～二〇%前後と少数にとどまる。

このように、北部九州における縄文晩期～弥生前期の石器組成は、蛤刃石斧の割合が著しく高く、対して石包丁が少ない特徴を持ち、典型的な伐採活動主体型をなす。とりわけ縄文晩期には、石包丁は出土するとしてもその数は相対的に少なく、むしろ蛤刃石斧の多さに注目する必要がある。石器組成にみる限り、初期農耕村落の設営および水田開発に活発な樹木伐採活動が伴った可能性が高い。反対に、稲の穂摘み活動が大規模に実施されていたとは考えにくい。

北部九州における初期農耕の開拓は、このように木伐採活動を前提とした形態であった。水田稲作痕跡が確認される多くの集落は、沖積平野の中央部でなく、丘陵上やその斜面部に立地するのが一般的である。最古の菜畑や曲り田の集落立地は、まさにその典型的な当時の景観を提示してくれる。蛤刃石斧主体という石器組成と考えあわせると、周囲に樹木の少ない低湿地が広がるのでなく、近接して樹木生い茂る森林植生やそれに近い植生環境の存在が推定される。その意味では、北部九州における農耕開拓のイメージは、黄金色に輝く広大な水田や稲刈り風景より、むしろ丘陵に近接した村落景観や森林等の樹木伐採による開墾活動に象徴されたものになる。人間と自然環境との対応関係の理解には、花粉分析等が有効な役割を果たす。例えば菜畑遺跡は、海岸に望む丘陵谷間に立地し、照葉樹林や湿地林に覆われた自然環境にあったが、縄文晩期～弥生前期には

それらの急激な減少と稲や稲科植物が増加が認められるという（中村一九八二）。これを、初期農耕者達による活発な樹木伐採活動による農耕地の開拓の賜物と評価したい。また同じく板付遺跡（中村他一九七六）では、シイヤカシ林等の植生破壊が三四三〇～二八八〇年前頃に急激に発生したことが観察され、分折者はそれを自然的原因とみるが、私は伐採用蛤刃石斧の出土と対応させ、人為的な森林伐採活動に原因を求めたい。

木材加工活動の活発化 — 片刃石斧類の急増

縄文晩期～弥生前期における活発な樹木伐採活動を伴う農耕開拓の後、北部九州一円に農耕活動が確実に定着するのは弥生前期後半である。その結果、前期末には福岡県今山で太形蛤刃石斧そして立岩で石包丁が大量生産され広域に搬出されるという、新たな生産—供給体制が出現する（中山一九三一・下條一九七五・一九八三）。先の観点から、前者は、各地での開拓活動の展開にかかる伐採用石斧の大量重要、後者は、定着活発化する農耕活動に伴う穂摘具の大量重要という社会的要請で発生したものと理解できる。

同時に、北部九州各地で加工用石斧類の増加現象が発生したことも、石器組成の観察から見いだせる。その範囲は福岡県下だけでなく、西は長崎県や東は山口県下の諸遺跡でも認められる。例示するのは、前期末～中期初頭における長崎県里田原、福岡県下の蓬ヶ浦

・四箇・鹿部、山口県綾羅木郷台地である(第4図)。この中には、片刃石斧類に未成品をかなり含む遺跡もある。その結果、おおむね次の様相が把握される。

一、縄文晩期〜弥生前期と比べると、全体として蛤刃石斧の割合が減少し、石包丁が増加している(長崎県里田原は石包丁が少ない)。

二、いずれも片刃石斧類が四割前後と極めて大きな割合を占める。

三、このように片刃石斧類の割合が高いものを、樹木の「加工活動活発型」と呼ぶ。

一般的に片刃類の占める割合は、北部九州においては前期中頃以前あるいは中期中頃以降で一〜二割程度である。対して、前期末〜中期初頭にかけては全体の四割程度を占める事例が多く、特異な様相を示す。先に掲げた縄文晩期〜弥生前期の石器組成を比較しても明らかである。こうした現象を、当然ながらこの時点における急激な木材の加工活動の増加の結果と理解する。また各遺跡で未成品も多数に含まれ、個別的にその重要を補った可能性も強い。その後、中期初頭以降には再び片刃石斧類の割合は減少し、一般的な組成率である二割程度にもどる。しかし、こうした時代的变化の理解には鉄斧類や鉄製穂摘み具等の実態の究明も不可欠だが、なお今後の課題となる。

基本組成の変化

―伐採活動主体から穂摘み活動主体型へ―

北部九州における縄文晩期以降の石器組成の推移全体をモデル化すると、第4図となる。この推移モデルは、蛤刃石斧主体から石包丁主体への転換過程を明確に示す。両者の割合が反転する前期末頃に大きな画期を設定し、それ以前の蛤刃石斧主体の石器組成(Ⅱ北部九州前半型)と中期以降の石包丁主体の石器組成(後半型)に大きく二分する。その中間点となるのが、片刃石斧類の割合が高く石包丁と蛤刃石斧が同数程度となる前期末〜中期初頭の石器組成(Ⅱ同・中盤型)である。

前半型 ― 蛤刃石斧主体

中盤型 ― 片刃石斧の割合が高く、また石包丁と蛤刃石斧が同数程度

後半型 ― 石包丁主体

北部九州で始まった初期農耕活動は、多数の蛤刃石斧を使用した活発な樹木伐採活動を伴う農耕地や村落環境の開発により特徴づけられる。農耕が確立・普及していく前期末〜中期初頭では、樹木伐採活動に加えて、木材の加工活動の比重が急激に大きくなり、あわせて穂摘み活動も増加していく。樹木伐採による開拓活動を踏まえた農耕地開発がなされた結果、木製農耕具の製作活動と穂摘み活

動が活発化したものと考えられる。そうした展開はそれ以降も引き続き、穂摘み活動が主体となっていく。中期初頭以降に片刃石斧類の割合が相対的に減少する理由は、穂摘み活動の増大化に対応する木材加工活動の相対的減少ともみえるが、むしろ鉄斧類の普及との関係も想定され、これについての見解は保留ざるをえない。ともあれ、北部九州における初期水稻農耕の開始と定着過程では、活発な樹木伐採を伴う農耕開拓活動が実施されたことに特質がある。

近畿中央部の様相 — はじめから蛤刃は少ない

畿内の初期農耕開始時の石器組成は、北部九州と著しく対比をなす。畿内において最古の農耕活動痕跡が発掘されているのは大阪府山賀遺跡（中西他一九八四）であり、弥生前期中頃に属する。それ以前の縄文晩期の可能性が強い塚が発見された大阪府牟礼（茨木市教育委員会）や、石包丁二点が出土した兵庫県口酒井（浅岡一九八八）等もあるが、その実態は明らかでない。現在の認識では、畿内で水稻農耕が確実に定着したのは弥生前期であり、北部九州と比べ時間的に隔たる。先ず前期とその直後の石器組成を例示する。とりあげるのは、兵庫県上の島・大阪府山賀・美園・池上遺跡である（第5図）。その結果、次の様相が把握される。

一、石包丁が全体の六〜七割程度を占め、太形蛤刃石斧を圧倒する。

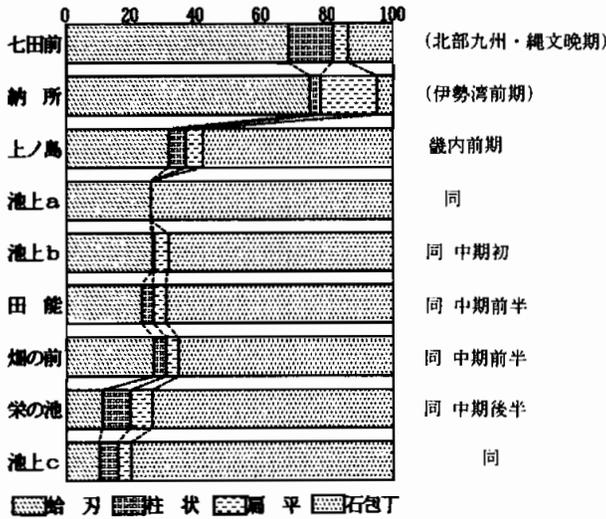
二、太形蛤刃石斧は二割五分〜三割程度を占め、後述するように中期後半と比べてその割合が少し高い。

三、片刃類は一割未満である。

畿内では、北部九州と異なる石器組成率で農耕活動が開始されたことは明らかである。前者は石包丁主体で、対する後者は蛤刃石斧主体である。このことは、畿内では農耕開始当初から穂摘み活動主体であったことを示す。同時に、蛤刃石斧を大量に必要としない条件にあったことも示す。畿内の初期農耕集落はおおむね沖積平野の中央部に立地し、農地として開拓されるべき土地に大規模な森林環境がなかった可能性も高い。この地の弥生人達は居住地周囲に森林があつたとしても、大規模な伐採活動を必要としない低湿地や草原等を初期農耕のための開拓地に選定し、直ちに活発な農耕活動を始めた可能性ある。

このように、北部九州とは別に、畿内では大規模な樹木伐採を伴わない開拓活動を想定できる。河内平野中央の山賀遺跡は、こうした村落景観や立地環境を典型的に示す。畿内における農耕開始時点の村落や開拓活動あるいは周囲環境のイメージは、北部九州のそれとは異なっていた。もちろんミクロには、中期後半と比較すると前半期における蛤刃石斧の占める割合はやや高く、当初には樹木伐採活動が活発であった。先行する縄文晩期の組成の実態はまだ明らかでないが、唯一、突帯文土器に伴う石包丁二点を出土させた口酒井では、

数回の発掘でも多数の蛤刃石斧は出土せず、石包丁主体の可能性を示唆する。縄文晩期もその可能性は強い。ちなみに口酒井も西摂平野の中央部低地に位置する。このように畿内では、北部九州とは違い、直ちに多数の石包丁を用いる穂摘み活動主体から出発したことに特質がある。



第5図 畿内における前半型と後半型の石器組成 (参考・北部九州と伊勢湾の組成)

穂摘み活動主体型の維持 — 蛤刃石斧はやや減少

前期～中期前半の石器組成は中期末まで基本的に継続する。すなわち、その穂摘み活動主体型のまま弥生時代を経過する。しかしミクロには、石器組成にわずかの変化が中期中頃に認められる。ついで、中期前半の兵庫県田能・京都府畑ノ前、および中期後半の大阪府喜志、大阪府瓜生堂・栄の池遺跡の石器組成を例示し、このことを明らかにする(第5図)。結果として中期前半は先に掲げた前期の組成と共通し、後半になると蛤刃石斧の減少が認められる。こうした観点から、やや蛤刃石斧の多い弥生前期～中期前半の石器組成を前半型組成、対する蛤刃石斧が少ない中期後半のそれを後半型組成に区別する。しかしその変化の程度は北部九州と比較して小さい。そして基本的な組成は変化しないまま、石器が消滅する弥生後期を迎える。

伊勢湾沿岸の様相 — 斧・斧の世界

伊勢湾沿岸において農耕活動が開始されるのは弥生前期である。この時点の石器組成として、三重県納所遺跡の資料がある。これは石包丁三点・蛤刃石斧四七点・柱状片刃二点・扁平片刃十一の計六三点で、圧倒的に蛤刃石斧を主体とする典型的な組成である。それほど極端でないが、こうした様相は三重県永井遺跡でもみられる。

ここでは、石包丁二点に対し、蛤刃石斧六点・柱状と扁平片刃各一点が出土した。この地においては北部九州と同様、活発な樹木伐採活動をもって初期農耕開拓が始まったことは明らかである。樹木伐採活動の程度は、蛤刃石斧が異常に多く、北部九州における農耕開始時点の縄文晩期段階と同じ様相をみせ、石包丁を主体とする畿内とは全く異なる。この組成は引き続き中期でも変わらず、前回に示した愛知県朝日遺跡群でみるように、石包丁が少なく蛤刃石斧の圧倒的主体の組成で継続する。この推移状況は、蛤刃石斧主体から石包丁主体へと急激に推移していく北部九州とは異なる。しかし中期末にはようやく石包丁主体への転換が生じたらしく、例えば貝殻山資料館の野口哲也氏のご教示によると中期末主体の愛知県岡島遺跡では、石包丁一〇点に対し、蛤刃石斧六点以上・柱状片刃三点・扁平片刃二点の出土があったという。逆転したとはいえないこの時点でも、他地域と比べると蛤刃石斧の割合はなお高い。こうしてみると、極めて活発な樹木伐採活動を伴って始まったこの地の農耕活動は、穂摘み活動が増加しつつも、樹木伐採活動主体のまま中期末に至ることになる。伊勢湾地域の拠点集落の多くが広い平野部に位置し、外見上は深い森林に取り囲まれているとはみえないが、花粉分析等による結果では周囲に広範な森林の存在が指摘され、平野部であっても伐採すべき樹木はあったことは確かである。例えば、安田喜憲（一九七九）による納所遺跡の花粉分析の結果では、弥生以前にはモミ

属やアカガシ属等を主体とする常緑広葉樹が周囲に育成していたが、弥生時代になると急激に草本類が主体となる低湿地環境に変化していくという。こうした実情と先に石器類の組成を考えあわせ、伊勢湾沿岸における農耕開始時点の開拓活動をイメージするならば、活発な樹木伐採活動を伴う平野部の農耕開拓活動を思い浮べることができる。とにかくも、伊勢湾沿岸においては、弥生時代を通じて樹木伐採活動が主体であったことに特質がある。

おわりに

以上、前稿を踏まえて、西日本各地における初期農耕開始と定着時点における開拓活動の地域的個性を提示した。こうした個性のより合理的な認識を目指し、今後とも作業を継続する。

引用・参考文献

千喜良淳 一九八七年 石器から鉄器へ 関西大学考古学研究記要 五

蜂屋晴美 一九八三年 終末期石器の性格とその社会 文化財論叢(藤沢

一夫先生古稀記念論集)

粉川昭平 一九八〇年 瓜生堂遺跡出土の植物種子瓜生堂(財)大阪文化

財センター

岡本明郎 一九六七年 工具 日本の考古学 III 弥生時代 和島誠一編

斎野裕彦 一九八八年 東北地方における稲作農耕の開始と展開 日本に

おける稲作農耕の起源と展開(日本考古学協会設立

四十周年シンポジウム 資料集)

酒井龍一 一九八〇年 亀井遺跡の石器生産亀井・城山(財)大阪文化財

センター

一九八六年 石器組成からみた弥生人の生業行動パターン 文

化財学報奈良大学文化財学科

佐原 真 一九七七年 石斧論 考古論集(松崎寿和先生六三才論文集)

一九八二年 石斧再論 森貞次郎博士稀記念古文化論集

石器資料

四分 奈良国立文化財研究所 一九八〇年 飛鳥・藤原宮発掘調査報

告書III

加茂 関西大学 一九六七年 撰津加茂

佐原真・横田義章 一九六八年 宮川石器館所蔵資料 伊丹市史

田能 尼崎市教育委員会 一九八二年 田能遺跡発掘調査報告書

池上 第二阪和国道内遺跡調査会 一九七〇年 池上・四ツ池

(財)大阪文化財センター 一九七一年 第二阪和国道内遺跡出

土遺物整理事業報告書 四

仮称池上小学校予定地内遺跡調査会 一九八〇年 池上遺跡

唐古 小林行雄他 一九四三年 大和唐古弥生式遺跡の研究 京都帝

国大学

勝部 豊中市教育委員会 一九七二年 勝部遺跡

鶏冠井 亀割均 一九八四年 石器 向日市埋蔵文化財調査報告書 向

日市教育委員会

亀井 (財)大阪文化財センター 一九八〇年 亀井・城山

同 一九八四年 亀井遺跡II

大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 一九八六年 亀

井(その2)

金石衛門垣内 都出比呂志 一九七五年 島本のあけぼの 島本町史

恩智 瓜生堂遺跡調査会 一九八〇年 恩智遺跡I

鬼虎川 (東大阪市教育委員会羊本隆裕氏のご配慮により実見)

七日市 (兵庫県教育委員会藤田淳氏のご教示による)

大里 大阪府教育委員会

- 上ノ島 尼崎市教育委員会他 一九七三年 尼崎市上ノ島遺跡
- 畑ノ前 精華町教育委員会・財団法人古代学協会 一九八七年 (仮称)
- 精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書
- 神足 長岡京市教育委員会 一九八〇年 長岡京市文化財調査報告書
- 第5集
- 栄の池 岸和田市遺跡調査会 一九七九年 栄の池遺跡
- 納所 三重県教育委員会 一九八〇年 納所遺跡(遺構と遺物)
- 朝日 愛知県教育委員会 一九八二年 朝日遺跡Ⅱ(本文篇)
- 西川津 鳥取県土木部河川課・島根県教育委員会 一九八八年 西川津
- 遺跡発掘調査報告書Ⅳ(海崎地区2)、同 一九八九年 西川津
- 跡発掘調査報告書Ⅴ(海崎地区3)
- 目久美 米子市教育委員会・鳥取県河川課 一九八六年 目久美遺跡
- 途中ヶ丘 峰山町教育委員会 一九七七年 途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書
- 吉河 福井県教育庁埋蔵文化センター 一九八六年 吉河遺跡発掘調査概報
- 吉崎次場 石川県立埋蔵文化財センター 一九八七年 吉崎・次場遺跡
- 第一分冊 資料編
- 矢ノ塚 香川県文化財保護協会 一九八七年 矢ノ塚遺跡
- 百間川 岡山県教育委員会他 一九八二年 百間川兼基Ⅰ
- 惣図 山陽団地埋蔵文化財調査事務所 一九七七年 用木山遺跡
- 用木山 山陽団地埋蔵文化財調査事務所 一九七七年 用木山遺跡
- 紫雲出 佐原真 一九六四年 石器類 紫雲出 託開町文化財保護委員会
- 七田前 福岡市教育委員会 一九八三年 有田七田前遺跡
- 曲り田 福岡県教育委員会 一九八四年 石崎曲り田遺跡Ⅱ
- 板付 福岡市教育委員会 一九七六年 板付、一九七七年 板付周辺
- 遺跡調査報告書 4、一九八一年 板付
- 葛川 刈田町教育委員会 一九八四年 葛川遺跡
- 大井三倉 宗像市教育委員会 一九八七年 宗像市教育委員会
- 綾羅木郷(明神地区) 山口県教育財団・山口県教育委員会 一九八八年
- 綾羅木郷台地遺跡(明神地区)
- 蓬ヶ浦 福岡県教育委員会 一九八四年 三沢蓬ヶ浦遺跡
- 鹿部山 日本住宅公団 一九七三年 鹿部山遺跡
- 四箇 福岡市教育委員会 一九八七年 四箇遺跡
- 千塔山 基山町教育委員会 千塔山遺跡
- 赤井手 春日市教育委員会 赤井手遺跡
- 里田原 長崎県田平町教育委員会 一九八八年 里田原
- みやこ 佐賀県武雄市教育委員会 一九八六年 みやこ遺跡

表4 北部九州における縄文晩期～弥生後期の石器組成

	蛤 刃	柱 状	扁 平	石包丁
七田前	15	3	1	3
曲り田	51	3	6	15
板 村	55	7	2	22
葛 川	11	1	2	5
大 井	7	2	2	4
綾羅木	11	9	4	6
蓮ヶ浦	16	16	8	11
鹿部山	14	7	13	14
四 箇	12	13	8	22
千塔山	6	0	2	20
赤井手	2	1	1	13

表5 畿内における前半型と後半型の石器組成
(参考・北部九州と伊勢湾の組成)

	蛤 刃	柱 状	扁 平	石包丁
七田前	15	3	1	3
納 所	47	2	11	3
上ノ島	6	1	1	11
池上a	26	0	0	74
池上b	30	1	5	77
田 能	12	2	2	36
畑の前	7	1	1	17
栄の池	13	10	8	85
池上c	30	17	12	234

表1 西日本における石器組成基本モデル

	蛤 刃	柱 状	扁 平	石包丁
北九州	40	10	10	40
山 陰	60	10	15	20
畿 内	12	4	4	80
北 陸	48	4	10	38
伊勢湾	55	9	26	10

表2 日本海・瀬戸内海沿岸の石器組成

	蛤 刃	柱 状	扁 平	石包丁
西川津	108	18	22	8
目久美	19	2	5	9
途中丘	16	3	6	4
吉 河	89	10	16	75
吉 崎	49	1	12	33
天ノ塚	10	16	3	136
百間川	13	1	2	75
惣図2	22	2	5	82
用木山	72	11	12	181
紫雲出	13	7	3	24

表3 畿内における石器組成

	蛤 刃	柱 状	扁 平	石包丁
四分	5	2	3	62
加茂	23	18	8	242
田能	53	15	9	338
池上	116	54	33	797
唐古	14	5	9	110
勝部	34	8	11	203
鶏冠井	3	0	2	19
亀井	86	11	21	426
金右衛	12	1	4	60
恩智	9	6	4	53
鬼虎川	45	22	19	197
七日市	69	6	32	187